

著書紹介 堀江薫, プラシヤント・パルデシ 著/
 山梨正明 編 『言語のタイポロジー-認知類型論の
 アプローチ-』

著者	パルデシ プラシヤント
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
号	6
ページ	47-49
発行年	2011-10
URL	http://doi.org/10.15084/00000686

〈著書紹介〉

堀江薫, プラシヤント・パルデシ 著／山梨正明 編

『言語のタイポロジー——認知類型論のアプローチ——』

講座認知言語学のプロンティア 5

2009年10月 研究社 A5判 xviii + 281 ページ 3,000円 + 税

プラシヤント・パルデシ

国立国語研究所 言語対照研究系 教授

本書は、人間の認知と言語の関係を考察する認知言語学と、世界諸言語を視野に入れて言語の普遍性と個性を考察する言語類型論の融合領域である「認知類型論」の研究書である。筆者の知る限り、本書は認知言語学と言語類型論の融合研究領域である「認知類型論 (Cognitive Typology)」という新しい学問分野への概説書として国内外ではじめてのものである。本書の目的は、堀江薫とプラシヤント・パルデシが個別に、または共同で行ってきた認知類型論的研究の具体的なケーススタディに基づいて「認知類型論」という学問分野の輪郭と可能性、展望を示すことである。

本書は6つの章から成る。1～3章および6章は堀江薫（名古屋大学）が単独で執筆し、4～5章はプラシヤント・パルデシ（国立国語研究所）が単独で執筆した。いわば、二人の著者による単著を合わせたものである。以下それぞれの章の内容を簡潔に紹介する（本書 viii～x より一部変更して再掲）。

1章「認知類型論とはどのような研究分野か」では、認知類型論という学問分野の概念規定、対象および方法論を述べた。その際に、言語多様性研究の現状、言語類型論という分野が機能主義言語学とどのように結びついて発展してきたかについても触れた。本書が対象としている認知類型論と機能主義的類型論の接点や、生成文法に代表される形式主義言語学の普遍性探求と認知類型論のアプローチの根本的な相違についても言及した。

2章「認知類型論の観点から見た構文の連続性」では、認知類型論のアプローチを体現している Croft (2001) の根源的構文文法 (Radical Construction Grammar) の複文の連続性に関する分析や、動詞と名詞の連続性や定形性 (finiteness) に関する最近の研究成果（例：Nikolaeva 2007）を援用し、日本語、韓国語、中国語、クメール語、アジュクル語、英語、マラーティー語を含む諸言語において観察される名詞修飾構文や名詞化構文の機能拡張の間言語差異およびその要因や動機づけに関する認知類型論的分析を提示した。その際に、これまで指摘されてこなかった日本語の名詞修飾構文（いわゆる連体修飾節）と「の」などの名詞化辞を主要部とする「名詞化構文」の機能的連続性と、それらの機能拡張を可能にする語用論的なメカニズムにも言及した。

3章「文法の認知的・処理的・語用論的基盤と文法化の方向性」では、言語構造に影響を与える外在的要因という認知類型論の中心的課題を扱った。具体的には、最近の文法化理論や処理類型論(Processing Typology)研究、語用論と文法のインターフェイスに関する研究の進展を踏まえ、個別言語の文法体系の基盤にあり、当該言語の文法化の方向性に影響を与える認知、談話、処理等の外在的要因を考察した。

4章「主観性を帯びる受動構文の使用に基づく言語の認知類型」では、機能主義的言語学、形式主義言語学において様々な観点から扱われてきた「受動構文」に対して認知類型論的な分析を提示した。具体的には、パラレルコーパスと母語話者からのアンケート調査を併用した、受動構文の使用頻度の間言語的相違が、文法構造に「主観性」が反映する度合いの違いを反映していることを指摘した。

5章「認知類型論のアプローチとレキシコン」では、色彩語などを除いては言語類型論の中で中心的に取り扱われてこなかった語彙類型論への貢献として、「食べる(EAT)」という意味を持つ基本動詞が、アジア言語においてどのような意味拡張のパターンを地理的に見せ、どのような間言語的変異や平行性が見られるかを認知類型論の観点から論じた。

終章にあたる6章「認知類型論：展開と総括」では、認知神経科学・脳科学という隣接分野の実験的手法を用いた、認知類型論の応用展開分野である「神経類型論」(Neurotypology)的な国内外の研究動向を概観し、最後に認知類型論の今後の展望と総括を述べた。

本書は、日本語学・日本教育や英語教育の有識者の注目を浴び、それぞれの分野を代表する専門誌『日本語学』(新刊クローズアップ、2010年1月号：71ページ、大堀壽夫、東京大学准教授)、『英語教育』(BOOK REVIEWS、2010年2月号：96ページ、守屋哲治、金沢大学教授)の書評として取り上げられている。

大堀(前掲)は「各章の題から見てわかるように、本書のテーマの多くはこれまで日本語文献で十分に論じられることのなかったものである」「本書は認知言語学ばかりでなく、対照言語学や文法研究一般に関心をもつ読者にとって有益な本であることは間違いない。新年度の教科書・参考書に推したい一冊である」と評価し、守屋(前掲)は「本書は詳細な認知類型論的分析を通して、日本語の社会的・文化的特徴が、言語構造の中にも表れていることを示している」と紹介している。

本書によって、認知類型論という創発的学問分野への関心が高まることが期待される。本書を読んだ方で認知類型論的研究のアプローチに賛同し、自分の研究対象の言語に適用される方が増えれば著者にとって望外な喜びである。

プラシャント・パルデシ (Prashant PARDESHI)

国立国語研究所言語対照研究系教授。博士（学術）（神戸大学）。神戸大学人文学研究科講師，国立国語研究所言語対照研究系准教授を経て，2011年4月より現職。

主な著書・論文：『自動詞・他動詞の対照』（シリーズ言語対照＜外から見る日本語＞第4巻，共編著，くろしお出版，2010），The more in front, the later: The role of positional terms in time metaphors. (with Kazuko Shinohara, *Journal of Pragmatics* 43, 2011), Toward a geotypology of EAT-expressions in languages of Asia: Visualizing areal patterns through WALS. (『言語研究』130, 2006), 「[非意図的な出来事]の認知類型論: 言語理論と言語教育の融合を目指して」(共著, 『言語学と日本語教育』Vol. IV, くろしお出版, 2005).

受賞：第1回「ことばと文化・教育」研究助成優秀賞（財団法人博報児童教育振興会，2007），The Chatterjee-Ramanujan Prize for Outstanding Student Contribution to The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2000 (*The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics*, Sage Publications).

社会活動：日本語文法学会大会委員.